

20世紀初頭の日本のメディアを活用した 福祉活動と、メソジスト文化としての賛美歌

山本 美紀

I. はじめに：メソジストの文化としての「メディア」「福祉活動」「賛美歌」

メソジスト派が、かつて「歌うメソジスト」とも揶揄されるほど、讃美する伝統を持つのは、賛美歌の機能を非常に理解していたと考えられるウェスレー兄弟によってその基礎が築かれたことによる。しかし、よく知られるように、ウェスレー兄弟は死ぬまでイギリス国教会の中でも、ハイ・チャーチ派の人であったから、「メソジストの賛美歌」とは正確にはイギリス国教会の信仰覚醒運動の歌と言えるだろう。それでは、そもそも「メソジストの賛美」とは何なのか。何が「メソジストの賛美」なのか。チャールズ・ウェスレーの賛美歌だから「メソジスト」なのか。

つまり「メソジストの賛美（歌）」という場合、それは必ずしも一様に語られるものではないと考えられるのだ。メソジストにおける信徒の成長や時代ごとに抱えるニーズによって、賛美歌に求められる事柄も変化し、その中で淘汰され残っていった要素が、「メソジストの賛美」という枠内で、ある程度固定化されていったように最近では考えるようになった。ちなみにこの、「メソジストの賛美歌」といった考え方や、チャールズ・ウェスレーといった名前さえ、現代の一般的なキリスト教会や信徒に共有されているものではないようである。先日訪れた、「神はわがやぐら」でオープニングを飾るオスロ（ノルウ

ュー)の伝統的なルター派教会では、教会の賛美リーダーはチャールズ・ウェスレーの作った賛美歌を知っているが、チャールズ・ウェスレーその人の名前を知らなかった。衝撃的ではあったが、「メソジストの音楽」が主張され得るのは、メソジストの存在感を誇示するためではなく、信仰を顧みる契機となる時なのだろう。

そのようなことから、本稿では「メソジストの賛美」を少し広く受け止めるため、「近代日本のメディアを活用した福祉活動と、メソジスト文化としての賛美歌」という、少々長いタイトルを付けた。

この「メディア」も「福祉活動」も、「賛美」と同様にメソジストの働きとしてウェスレーが最初から力を入れられていたものである。ウェスレーが編んだ最初のメソジスト派の賛美歌集『ファンダリー・コレクション』(1742年)は、ファンダリー集会所¹に集まる信徒に向けたものでだが、そこには集会所だけでなく、本の部屋(Book Room)、ロンドン初の無料保健所、無料の学校などが備えられていた。最初の集会所が、「文書伝道」としてのメディア活動、福祉活動の拠点として機能していたのである。「学校」という概念も、福祉的性質が今日よりも強いものだったと考えられる。

それでは、ウェスレーの宣教活動開始時、「賛美」はどのような位置づけを与えられていたのだろうか。確かに、ジョンは2冊目に手がけた賛美歌集『讚美歌選集 Select Hymns with Tunes』(1761)において、「賛美の心得 Directions for Singing」を添付し、歌い方について厳しく規定している。しかし、どんな時にも賛美を歌うことの始まりは教会内ではなく、路傍での商売人たちにヒントを得たものだった。ウェスレーは、その時代の多くのエンターテイメントの、言わば「客寄せ」の様式に気づいたのである。村の広場にやってくるレスリング・チームや、クマ使い、闘鶏師といったプロの芸人は、客が充

¹ 1500人が集まる礼拝所、300人の集まる小会議所、図書室(Book Room)、修道院が崩壊して以降の、ロンドン初の無料保健所、無料の学校(2人の先生と16人の子ども)、寡婦の家、そして説教者たちの住居があった。(Westbrook, B. Francis 1974. Some Early Methodist Books, Wesley Historical Society Lecture, London)

分に集まるまでショーを始めない。シェークスピア演劇の当時の状況を再現した公演などを見ても、口上が非常に練られていることがわかる。通りの証人たちの風情は、おそらく一つの文化を表象し、一定の水準があったことは十分想像できる。というのも、世界救世軍記念館での調査においては、当時の日本の紹介に必ず町の物売りの様子が絵入りで紹介されており、その土地の文化の表象として路上の物売りは認められていたことがわかるからだ。それほど、通りの様子は文化を理解する窓となり得たのだろう。

ここで改めて確認したいのは、ウェスレーは当初、注意を引きつける特別な機会として、それが市場であろうと街角であろうと讃美歌を使ったということだ。その中には、世俗の Tune に歌詞を置き換えたものもあっただろう。この使い方は、音楽の「呼び込み」「注意喚起」としての用法である。通りを行く人々は、芸人たちが大声で呼び込みの口上をたれるのに慣れていても、聖職者が歌で人々を呼び止めることには驚きをもって立ち止まったという

(Edger1952,68)。

このように、メソジスト運動の始まりは、「賛美歌」

による呼びかけから始まり、賛美歌集をはじめとした出版物発行としての「メディア」活用から、やがて「福祉活動」という、メソジスト派の特性を育てていく。そして、このようなメソジスト文化としての「福祉」活動や「メディア」活用が、「賛美」と共にどのように日本に入ってきたのか、これから考えていこう。

II. メソジスト文化の近代日本の庶民への広がり

i. 日本救世軍の場合

日本の初期プロテスタントの受容者の多くが、士族出身の知識人であったということは知られている。井上章一は「近代のプロテスタントは、陽明学的な思考の上に受容された面をもつ」と指摘する(井上 2013,73)。庶民(平民)に広くプロテスタント信仰が庶民に受け入れられるようになるのは、山室軍平の救世軍以来なのではないかと思われる。それまでは、学校教育を拠点とした

アメリカ人宣教師や、アメリカ帰りの知識人によるエリートの信条としての福音が中心だったのだろう。もちろん、山室軍平自身が1887年（M20）路傍伝道によってキリスト教を知ったということだから（山室1929,29）、町中で宣教活動は行われていたと考えられる。しかし、その後の彼のキリスト教会での処遇や、伝道の際の同僚の反応などをみれば、やはりキリスト教は当時の平民には敷居が高いものだったと考えられる。その中で、どうして山室が信仰を持つようになったのか。彼もまた、岡山の養家では厳しく朱子学を学んでいたのである。これらを踏まえるならば、山室軍平が初めて救世軍宣教師たちに会った時（1895,M28年）、彼らのぎっくばらんな様子に「いかにも高慢であるようにわたくしには感じられて、はなはだ不愉快に思った」（山室1929,112）というもうなずける。

そのような山室を介して、日本救世軍の活動は、先に見たメソジストの三つの特色である「賛美歌」「メディア」「社会福祉活動」を中心に展開する。メソジストの一派として発展したのですから、当然と言えば当然である。中でも、賛美歌は当初より「呼び込み」や会衆の雰囲気作りの色彩が濃いものである。救世軍の名物でもある「バンド」の呼び込みのスタイルは、英国において今も活用されており、週末、商店街を歩けば、救世軍のバンドが聖歌を演奏し、礼拝をふれて回るのに普通に会う。

またウィリアム・ブースは著書『最暗黒の英国とその出路 In Darkest England and The Way Out (1890)』の中で、貧しい人たちの宿泊施設での夜の集会について、以下のように記している。「私どもは元気のいい救霊集会を催す—中略—婦人らはバンジョーやタンバリンを持っていて、二時間くらい諸君はロンドン中でも珍しい陽気な集会に列する。」（ブース／山室1970, 126）また、「集会の指揮者は、前の話し手の述べた経験を現すような聖歌を一、二節歌い出す。あるいは士官学校から来た娘らの一人が貴学の伴奏付きで独唱し、折り返しになると一同が威勢よくはしゃいでこれに加わる。」（ブース／山室1970, 127）

これはロンドンでの様子ですが、山室が毎夜ひらかれる救世軍の集会で「外観はいかにも奇妙不思議なものであったが、それにもかかわらず、わたくしは

一義的にトラクト伝道の拡大したもののだが、その内容は豊富で、賛美歌歌詞・チューンの掲載や、福祉的視点の提供など、信徒教育を通して社会教育を実現するものであった。現在残っている飲酒を戒めるガラススライドや、娼館のスライドなどは、それを用いて社会の害悪について説くものであったと考えられる。

日本の救世軍の音楽幻燈隊の初陣は、1902 (M35) 年2月11日、横須賀でのことだが、この時、同時に音楽隊の結成も結成され、本部のある英国から直接幻燈を受け入れていた²。幻燈のプログラム構成は、上映が3部に分かれており、第2部に『諸外国に於る社会事業』『日本に於る社会事業の状況』という社会事業が、第3部に『日本に於る救世軍の運動事業の実況』という活動報告がなされ、さらに、「奏楽」や「二人合唱」「四人合奏」「独吟」(独唱か詩の朗誦)といった音楽や当時の娯楽に関する項目が並び、音楽的内容の充実が、幻燈集会にとって福祉活動の報告と共に、重要な側面を担うものとしてあったことがわかる³ (写真1)。つまり、集会そのものが当時の幻燈の用いられ方と同様、一つのエンターテイメントとして成立しており、メソジストの伝道活動において、賛美歌や音楽は信仰を歌うと同時に、常にエンターテイメント性が保持されていたことがわかる。

ii. 三要素「メディア」「福祉活動」「賛美歌 (エンターテイメント)」の展開 ——災害を契機とした一般メディアとのタッグ・競合

² 「この度救世軍に於て軍楽隊が編成せられ、幻燈を携へて東海道筋より中国、四国に推出す・中略・我が軍中に軍楽の進歩を見る一階段として之を喜ぶ者である升」

「新たに倫敦から着したる幻燈の絵を見るに、大将ブース以下、救世軍の名将方の写真、様々の社会事業、貧民町事業の光景等、注意すべきもの多く、取分け有名な出獄人スロツス爺の続き物の如きは、感動すべきものであり升。之に日本の救世軍各方面の写真等を加へて、立派な幻燈図画が調ひました」(以上、「軍楽隊の編制」『ときのこゑ』1902 (M35) 年2月1日、2・3面)。

³ 「救世軍音楽幻燈会」『ときのこゑ』1903 (M36) 年2月1日、4面

上記のように、救世軍の軍歌や幻燈伝道といった内容に3年ほど費やしていたが、この研究についての問題は、ガラススライドなどは残っているものの、どのような筋書きだったのか、「台本」が残っておらず、立体的な分析が難しいという点にあった。つまり、その幻燈が上映された様子について書かれた新聞などを参照するしかなく、作品そのものにさわれない、というもどかしさがあったのである。

そういう限界の中で、2014年度から関わっている総合文化雑誌『会館芸術』についての共同研究の成果として復刻が始まり、さらにその子供版ともいえる、『アサヒカイカン・コドモノ本』に関わるようになった。雑誌『会館芸術』は、当時最新鋭の総合文化施設「朝日会館」（大阪）の発行する総合芸術誌であるが、それにもかかわらず、主催者「朝日新聞社会事業団」の社会福祉活動の記事が初期のころは実に多い。なぜなら、朝日会館に於ける芸術文化的活動は、社会福祉的意味を第一としたからである。

「朝日新聞社会事業団」の決算報告書を見ると、朝日会館の公演事業と社会福祉の活動は対等に扱われており、そこから、雑誌の発行もクラシックコンサートの企画も子供関係の企画も、すべて「社会福祉」活動の延長線上にあったことがわかる。他にも、決算表には交易事業明細費の中に「大阪基督教青年会維持費」がある一方⁴で、『コドモノ本』には、「アサヒ・コドモノ会」のクリスマス会に登場した銀座教会の聖劇の様子⁵や、「日曜世界社」や「日本基督教会日曜学校局」といったキリスト教会系のかなり使い道の限られる本が「〔こどものために〕良い本や雑誌」に推薦されているなど、随所にキリスト教色に気づかされるのである⁶。

この「コドモノの会」は朝日会館で定期的にもたれた子供向けの演芸会のようなもので、当初の目的は、子供のためにより映画を上映することを目指してい

⁴ 「社団法人朝日新聞社会事業団収支決算表 公益事業明細」 昭和3年1月25日-昭和3年4月30日。

⁵ 「東京の朝日こどもの会クリスマス」『コドモノ本』第3巻2月号、1933年2月、16頁。

⁶ 「児童に関する雑誌」『コドモノ本』第2巻2月号、1932年4月、23頁。

た。もっとも、子供のために作られた映画が当時それほど多くなかったため、後には様々な内容を含むようになるが、それでも映画が含まれることがその後も大変多かった。子供のための企画が〔教育的〕映画から始まったということや、当時の新聞各社の社会福祉活動への傾倒、つまり、後の「社団法人朝日新聞社会事業団」による「ならぬさきの慈善」⁷への傾倒に、日本におけるそれまでの救世軍を初めとしたキリスト教社会福祉活動や文書伝道の影響が考えられるのである。

「アサヒカイカン・コドモの本」が、朝日新聞にとって最初の子供を対象とした書き物であったわけではない。先行研究によると、「週刊朝日」の中に設けられた「コドモの頁」が最初のもので、それが「週間コドモアサヒ」「コドモの本」に分化していったという。(表1)

⁷ 「○社会事業方面 本社社会事業団は同情週間の一部を除くその他「なつてしまつてから」の慈善的行為より「ならぬさき」の社会事業に立脚し、殊に次代の健全なる社会建設を企画し児童方面に主力を注ぎつつあり、一以下略一」(社団法人朝日新聞社会事業団事業報告 昭和5年5月-6年4月)

<表1> 朝日新聞社内での子供関連事業の時系列

1922年 『週間朝日』(1922年2月25日創刊 12頁)

「中等学校入学試験に就いて」

1922年 『週間朝日』に、「こどもの世界」ページができる(以降続く)。

「Oの腕白・Sの悪癖」(1922年3月5日号 22頁)

1923年 『コードモアサヒ』創刊(1923年12月)

1926年 大阪朝日会館 オープン

1926年 大阪朝日会館にて、子供のための企画開始(10月)

「少年少女映画『二つの玉』の会」

*「アサヒコードモ映画会」を経て、「アサヒ・コードモの会」へ

1931年 『会館芸術』創刊(5月)

1931年 『アサヒカイカン コドモの本』創刊(12月)

実際、救世軍のホームページ上には、東京毎日新聞との関係性を示した一文が掲載されている。

「1906年（明治39年）日本は日露戦争直後で失業者が沢山でた年でした。師走を前にして、当時、救世軍の日本の司令官ブロード大佐は「慰問かご」の計画と題し救世軍公報紙『ときのこえ』紙上に「大佐の書簡」を發表しました。—中略—そしてこの運動〔慰問かご〕は東京市中のみか横浜、神戸、仙台、前橋、高崎、横須賀と拡大されていきました。

この時、救世軍の良き理解者であった『東京毎日新聞社』の主宰者、島田三郎氏は紙面の一部を割いて寄付を呼びかけてくれました。」⁸

他にも、日露戦争や関東大震災を扱った記録映画フィルムには、川に雑多なゴミや瓦礫とともに流されてくる死体など被害状況を示す生々しい映像⁹があり、同じように川に木片に混じって浮かぶ死体を描いた幻燈用ガラススライドが弘前教会といった歴史あるキリスト教会に残されている。このことから、災害などの募金活動を行うキリスト教会のアピールとメディアに流れるニュース映像が、観客に重なって受け止められたとしても不思議はない。

日本における社会福祉活動に、キリスト教が大きな影響を与えたことは、すでに知られていることであり、それ自体は特別新しいことではない。しかし、それがキリスト教的文化を吸収し、その背景をどのように保ち、あるいはそこから距離を持つようになったのか、その部分は「日本人のキリスト教受容」の特徴を示すと考えられる。日本国中に広がる伝統あるミッション校がこれほど存在し、宗教的な弾圧も無ければ、キリスト教禁制時代の余韻も

⁸ 「歳末助け合い運動の始まり」。「慰問かご」は「社会鍋」の前身。
<http://www.salvationarmy.or.jp/index.php?%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E9%8D%8B%E7%89%A9%E8%AA%9E>（2018年9月5日閲覧）

⁹ 「発掘された映画たち—日露戦争と関東大震災の記録映画」東京国立美術館フィルムセンター2018年2月28日上映。

ほとんど見られぬ現代にあっても信徒数は1パーセントをキープしている現状は何によるものか。もちろん、それがただ一つの要因によるというつもりはない。しかしながら、福祉活動とメディア（この場合は新聞社）との関わりをたどることは、キリスト教が担った社会福祉活動や文化活動が、徐々にメディアに移行されていく時期をたどることになるのではないか。特に、キリスト教文化の中でも、ことさら力を入れてメソジストが育ててきた文化「メディア」「福祉活動」「賛美歌（エンターテイメント）」を軸とすることで、一層はつきりしてくることが期待できる。

救世軍の「慰問かご」も、朝日新聞・毎日新聞両社の社会福祉活動への大々的な介入も、関東大震災を契機としていることから、日本社会における社会福祉への考え方が、この頃から、つまり震災や戦災など庶民の生活の広い範囲に影響を及ぼす予測不可能な災いを契機に、徐々に変化してきたということがおぼろげに見えてくるのである。

Ⅲ. メディアによる社会福祉活動の場としての「朝日会館」とキリスト教

i. 朝日会館と社団法人朝日新聞社会事業団（後に、財団法人朝日新聞厚生文化事業団 1928年1月25日～）の朝日会館運営について

「朝日会館」は、1926年（大正15年）10月9日、大阪朝日新聞創刊五〇周年の記念事業として、大阪中之島（大阪本社の隣接地）にオープンした総合文化施設である。オープン以来、大阪が誇る当時の最先端の文化センターだったと考えられ、その会館建設計画にあたっては、朝日新聞社社長の村山長拳が自ら陣頭指揮を執り、「文学（劇）、美術音楽の三位一体の芸術文化の殿堂」（十河 1963,35）を造る意思のもと、「三階の展覧会場では美術を、四階以上の公演場では時局問題や學術文化に関する講演会をはじめとし、新劇、能楽等の新古典芸能、和洋音楽等の公演を催すというつもり」で設計されたという。1000人以上を収容できるホールといえ、当時はまだ中之島公会堂（1100人）くらいしかなく、また平土間の公会堂は客席から見えにくかったり、音響

や空調が今ひとつだったりということで、朝日會館ができてからは演奏家がこぞって舞台に立った（十河 1963,35、小倉 2003,3）。

そのような朝日會館を、第4代館長の十河巖は「文化芸術の新しい殿堂として朝日新聞が大阪市民に贈るもの」（愛川／十河 1976,2）という言い方をする。なぜなら、「朝日會館設立の主旨は、朝日新聞が社会、文化事業を行つて社の利益の一部を社会に還元しよう」（愛川／十河 1976,12）というものであったからだ。

會館の運営は社団法人朝日新聞社会事業団¹⁰（1928年－後の財団法人朝日新聞厚生文化事業団、以下社会事業団）が担った（前島 2016,237、小倉 2003,4）。社会事業団はいわば、お金を再配当する「継続的チャリティー」システムである。「會館で得た純益は事業團の社会福祉事業に回す」（愛川／十河 1976,12）ことになっており、「しかもその純益金をふやすため、丹波秀伯の斡旋で時の大蔵次官通達が発せられて、〔社会福祉事業に回すという条件で〕朝日會館で演じる音楽、劇等の入場税は免税」（愛川／十河 1976,12）という特別優遇措置がとられて、それが終戦まで続いた。政府としても「純益を社会福祉に回す」ということで、目に見える形で民間主導の福祉事業を支援したということなのだろう。

いずれにせよ、「新聞社は新聞を発行するだけでなく、広く社会教化のため公共の利益を計る事業をやらねばならない」（村山龍平）や、「新聞社が個人または一会社の私有物ではなく、国家社会の公共機関であることはいまさら事新しく説くまでもないが、今日のようにその勢力が大きくなるに従って、これに関与する新聞人の責務もますます重くなってきた－中略－公益事業團である新聞社はより多くの特典や便宜を国家社会から享けているのである。その享けたところのものを形に変えて社会に払い戻しをしなければならない義務がある。」（東京朝日計画部長鳴沢金兵衛）などといった考え方が、社会事業団の活動理念となっていた（小倉 2003,4）。これには、関東大震災時や第1次世界大戦での新聞社が直面した現場との葛藤も反映されていると考えられる。十河巖

¹⁰ 1926年10月～1928年1月までは、朝日會館臨時役員会が運営を担当。

が言うには、「〔新聞の発行部数が増える中で〕新聞事業でこんなに儲けてもいいのだろうか」という話が幹部の間で持ち上がった。その一部はなんらかの方法で社会に還元すべきではないかという議論」が起り、「その変換方法として、文化事業を催して社会の福祉民福のために尽くすことが望ましい」（十河 1975,7）というのが、朝日会館における藝術企画の根本的原因となったということだ。

このような社会貢献的な視点から比較的早い時期から取り組まれたものの一つが朝日会館の子供対象企画である。

1930/S5年5月-S64月の朝日厚生事業団事業報告には「アサヒドモの会」について、

「純真なる子供に対する清浄なる娯楽??の皆無なるに鑑みて毎月一回定期に朝日会館に於て開催して感謝と賞賛をうく」

と初のコメントが掲載される。この事業報告には「少年保護事業」

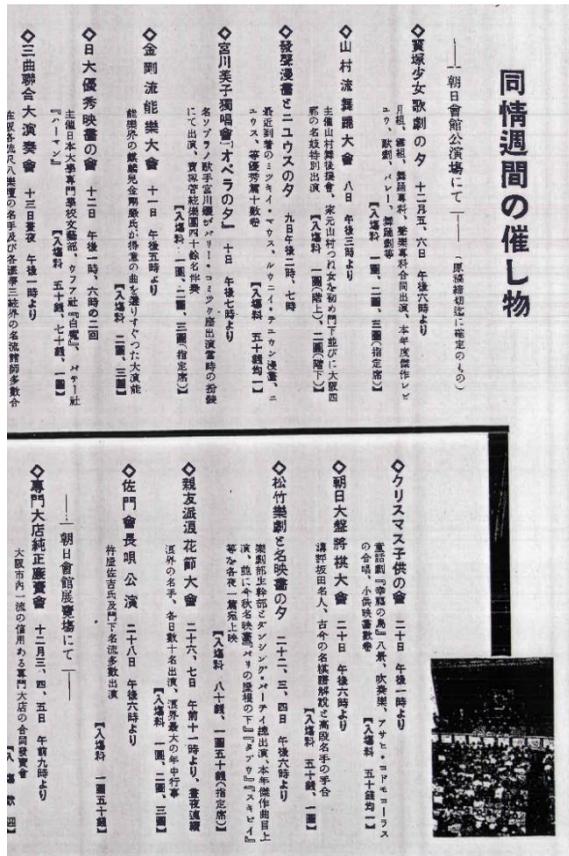


図 2 「同情週間の催し物」

(『会館芸術』1931年12月号(第4号)、42頁)

「子供方面婦人委員」「農繁期託児所」「公衆衛生訪問婦協会」などがあがっている。実際、朝日会館の収益は、自主公演も貸し館公演も福祉事業に回すということだったので、項目には戦前では歳末同情週間のほか、「困窮者の厚生資金支給、災害地への救護班派遣、病院の無料ベッド設置、無料診察券配布、農村の健康相談所開設、応召軍人家庭への文豪具贈呈など」があった。これらの活動が、救世軍のそれまでの活動とどれほどの割合で重なるだろう。

ここで、「朝日会館」発行の雑誌『会館芸術』1931(S6)年12月号の「歳末同情週間」の頁を見てみよう（写真2）。

これを見ると、コンサートに映画、演劇と大変なラインナップで展開されていたことがわかる。また、「本年度同情週間について」では、朝日新聞社における同情週間の起りと経過、これまでの成果報告が掲載されている。

『同情週間』それはもう完全に通り言葉にすらなつて仕舞つた。恐ろしい関東大震災の対象十二年に初めて東京朝日で試みたのがその最初である。大阪あさひでは大正十五年に第一回を催し、昭和二年第二回目から朝日新聞社会事業団で催してきて本年は第六回目である。－中略－大阪に於ける第一回同情週間の挙について、－中略－本社岡野取締役は『理想から言へば京阪神三市同意にこの週間を行ひたいがなにぶん本年が初めてのことであるので、先づ大阪市のみこれを行ひ余力あらばその他の年にも及ぼしたい』云々と述べたが、昨昭和五年にこの理想は初めて実現して、京阪神三地共に立派な成績をあげることが出来た次第である。」¹¹

さらに、

「かうした催しから社会の協同意識がだんだんと深められていくのは又一つの立派な救護で－中略－大阪にでは所謂カード階級という約一萬三千の戸数人口にして五萬人は失業病氣等あらゆる方面から生活力を失つて同胞の援助救援をまつているのである。社会事業が行き届いてくるとおぼ種の一時的救

¹¹ 「歳末同情週間」朝日会館『会館芸術』第4号、1931年12月、41頁。

済はさまで必要でない時が来るであらう。現に米国などは共同資金を広く徹底的に募集して—以下略—¹²

とアメリカでの社会福祉事業を紹介し、日本で新たに施行される「救護法」についてもふれている。

このようなことから、1931年の時点で、キリスト教を発端とした社会福祉活動が、新聞社による社会福祉活動に担われるようになり、「社会事業団」等の組織形態を備えた活動として整いつつあったこと、また国としても「救護法」という、社会福祉に関する法整備が始まっていったことがわかる。もちろん、ここには都市部における宗教共同体を背景としない「共同体構成の意識」も育っていきつつあったことだろう。

ii. 「アサヒカイカン・コドモの本」と高瀬嘉男

運営母体である社会事業団の、『なつてしまつてから』の慈善的行為より『ならぬさき』の社会事業の姿勢を反映し、朝日会館では特に、様々なジャンルの芸術教育（趣味教育）が、子供とその保護者に向けて提供されていた。柱となっていたのは、3つの事業「コドモの會」（以下、「コドモの会」）『アサヒカイカン・コドモの本』（以下『コドモの本』）「アサヒ・コドモ・芸術院（アテネ）」（以下「コドモ・アテネ」）であり、この順で始まっていく。『コドモの本』は、教義的な内容を持つ「少年少女映画『二つの玉』の会」以来、活発な子供対象の活動を行う各地の「コドモの會」の共通機関誌で、1931年から出版された。

『コドモの本』発行に関する変遷について、十河巖は『朝日會館史（大阪朝日編年史別巻）』の中で、次のように語っている（愛川／十河 1976,229）。

「月刊機関誌「アサヒコドモの本」通巻一四〇八号（昭和十九年三月現在）で、大阪、京都、神戸の三都市の「アサヒコドモの会」ならびに横浜「アサ

¹² 同前。

「ヒコドモの会」の四都市の共通機関誌として発行していたが、紙の配給事情の都合によって十九年四月限り会館発効の「厚生文化」誌に統合された。」

また、現存しないものの、創刊号については、

「アサヒカイカン・コドモの本」の創刊号は、昨年のクリスマスのコドモの會（第六十六回）当日に発行した「アサヒ・コドモの會の本」であります。菊判本文二十四頁に関西地方の童話・童謡作家二十五氏の作品を網羅した美しいプレゼント・パンフレットで、同誌の誕生は単にコドモ界のみでなく、各方面から多大の賞賛と激励をうけ、将来への発展を期待されました。」¹³

とあり、25氏もが寄稿した、充実した内容であったことが想像できる。十河は「通巻一四〇八号」と驚異的な数字をあげるが、現在確認できるのは39巻のみである。雑誌の全容も现阶段ではわかっていないが、それでも、現存する『コドモの本』からは、実に幅広いジャンルが取り上げられていたことがうかがえる。

例えば、外国人の子供の写真が拍子を飾る1932年3月号（第2巻第1号）は、ページ数が24頁あり、冒頭よりアサヒ・コドモ・アテネなどの様子を写した「アサヒ・コドモ・グラフ」、3月にちなんだ日本文化の説明が続き、公募作品による歌《兵隊進め》、童詩、童話、漫画、工作、対話（説話）、紀行文（ジャワの影絵芝居）、詩、つなぎ絵漫画（これは、現代では無い）、童話、公募した自由画の選評と自由画、大人に向けた「児童の絵画教育について」

（日本造形美育研究所森下文一郎）と題したおすすめ文、工作遊戯（作って遊ぶ）、子供の科学（軍事にまつわる）、コドモの新聞、コドモの映画、コドモの会館だより（コドモの会をはじめとしたこども対象事業の活動広報）、コドモ・レコード、綴方と綴方選評、童詩選評、次号の予告と作品募集要項等、盛りだくさんな内容である。

¹³ アサヒ・コドモの会『コドモの本』第2巻2号、1932年4月、24頁。

そのような中に、先述したような銀座教会の聖劇が、「コドモノ会」のクリスマス会に登場¹⁴していたり、「日曜世界社」というキリスト教出版社のかなり使い道の限られる本、例えば「基督教家庭新聞」「日曜学校の友」「日曜学校」が「児童に関する雑誌」の項目に挙げられていたり¹⁵、賀川豊彦による『コドモ・キリスト物語』が「良い本と雑誌」¹⁶の項目に挙げられているのである。

これには、初期からの『コドモの本』の出版を担った編集者で、関西学院出身者のクリスチャンであった、高瀬嘉男の存在が大きいと推測される。彼についてはどのような人物であったのか、ほとんど情報が残っていないが、1901年、淡路島に生まれ、朝日新聞社で働いていた時、童話の連載を任せられ、翻訳作品を中心に童話を執筆した。その後、英米文学の翻訳で活躍するほか、創作も手がけるなど、児童文学の世界で活躍する。1983年に死去したこと、『少女探偵ジュディ』や『名犬ラッシー』の翻訳者であることが知られている。また、彼について書かれた数少ない論考の上笹一郎「無弦＝高瀬嘉男と尾関岩二（上）」によると「高瀬嘉男は一九〇一（明治三十四）年の大阪生まれ、天王寺師範学校を出て小学校教師となったが、思うところあって関西学院の社会学科に入学、一九二七（昭和四）年に卒業して大阪朝日新聞社に入社、二十六歳。キリスト教への信仰的傾斜は、この時期のことであるようだ。」（上 2004,12）とあり、朝日会館がオープンしたころに入社し、信仰を持ったということだろう。大阪朝日新聞社の記者として働く傍ら童話や童話についての評論を書くようになり、雅号を「無弦」と決めて、朝日新聞に入社したその年に『少年基督伝』（新生堂）『聖フランシス物語（主教児童文芸書1）』（日曜世界社）を出した。充実した活動にも関わらず、彼の情報が少ないのは、戦後1冊も著書が出なかったためと考えられている（上 2004,12）。

¹⁴ アサヒ・コドモの会『コドモの本』第3巻2号、1933年2月、16頁。

¹⁵ アサヒ・コドモの会『コドモの本』第2巻2号、1932年4月、23頁。

¹⁶ アサヒ・コドモの会『コドモの本』第2巻8号、1932年10月、24頁。

彼が淡路島で育ったと言うこと、また文書についての関心や、日曜世界社との関係性などから、日曜世界者を創設した西阪保治がフリーメソジスト教会出身の牧師であり、出版業界に乗り出したきっかけが、淡路島での子どもを対象としたトラクトの作成や、日曜学校の教材であったこと、また高瀬が関西学院大の出身者であることから、高瀬の子供の頃から、キリスト教の子供を対象とした文書（子供向けのトラクトなど）は身近なところにあった可能性がある。

彼が朝日新聞社に入社した年に2つの児童文学作品を著し、さらに大阪での小学校教師の経験も見込まれて、新しくできた朝日会館の子供を対象とした出版物の企画に抜擢されたことは十分想像できる。そして、当時の彼自身の出版社との関係性もあって、『基督教家庭新聞』『日曜学校の友』をはじめとしたキリスト教色の強い出版物が、創刊当初の『コドモの本』誌上で推薦されたのだろう。

本稿のテーマとの関わりで少し触れておくならば、『コドモの本』が創刊された1931年は、新しい『讃美歌』（1931年版）が出された年でもある。北村宗次によると、「讃美歌が新しくなったということは教会のなかでも大きな話題になったことを今でも覚えています」と言うほどで（北村2014,116）、その讃美歌集によりやく日本人の讃美歌作家の名前が明記された。挙げられた讃美歌作家は12人いる、その中でメソジスト派は「天野恒次郎」（教派不明1曲）、「別所梅之助（メソジスト派3曲）」「藤本伝吉（教派不明5曲）」「毛賀（教派不明ケガ・スミ、7曲）」「松山高吉（組合→聖公会、4曲）」「三輪源造（3曲）」「宮川勇（組合、7曲）」「西村清雄、奥野正綱、スズキ・キヨミツ、植村正久、由木康（メソジスト派 ユウキ・コウ、8曲）」の2名である。聖公会の松山高吉を入れると3名となる。

当時のキリスト教出版物が、どのような受け止めを持って社会に受け入れられていたかは注意が必要だろう。救世軍に出会った山室軍平が、献身において「労働者、職工諸君の間に入って彼らの教化に従事することを願い」（山室1929,112）、その内容が「ただ神の栄えと人の救いとのために生きる聖徒は、一体どのような品性を備え、又どのような生活を営まねばならないのか、またどのようにその職業を勤め、その家庭を整えねばならないか」（山室1929,

113) といった、信仰と直結した実際の・実践的なものであったということは、現代とは違うものであろう。山室軍平を救世軍に引き合わせた石井十次もまた、岡山孤児院創設にあたっては、『『国家の良民』の育成』『『神の業』としての慈善事業』という2つの側面を当初から持っていた(細井 2009, 119-121)。

つまり、当時は、近代教育の側面を担うものとして、キリスト教が受け止められていたということが指摘できる。教会が日本社会とつながり、大衆にキリスト教が開示されていくにつれて、人々としては、海外とも対等に近代都市機能を回していくための教育的意義、あるいは、近代社会に転じていく際のひずみを調整していくキリスト教会の役割に注目し、そこに価値を見いだしていたことがわかるのである。換言すれば、日本におけるキリスト教受容は「役立つもの」でなければならず、だからこそ、戦争時には利用されキリスト教を背景とする「福祉活動」や出版等のメディアは、都市ネットワーク構成を可能とするツールの部分のみが取り出されて成長していったと考えられるのである。

IV. 終わりに：メソジスト三要素と社会の受け止め

本稿においては、メディア、福祉、賛美歌を、ウェスレー以来のメソジスト文化の三つの大きな柱とうけとめてきた。それは、賛美歌が「歌われる」だけでなく、「読まれる」ものでもあった時代、賛美歌の伝搬において、出版が大きな関係性と影響をもち、その内容が教義的・教理的で社会教育的な役割を担っていたためである。日曜世界社の西阪保治らによる『日本キリスト教出版史夜話』には、「ウェスレー兄弟は、書籍殊にキリスト教文書の著術と出版と、それを廉価で読者に的今日することを恒に強調した。—中略—これは合衆国でも初代メソジスト教派の間に伝えられて来た精神であった。」とのウェンライトの言葉が引用されている(西阪／河本／秋山 1984,26)。私たちは「何が歌われてきたのか」を考えると、「何が読まれ共有されてきたのか」を同時に考えてみる必要がある。

「これが賛美歌としてふさわしいのか」という議論や、今日はごとの賛美の特性が主張される時、讃美歌には、元来大きな2つの縛りがあることに気づかされる。一つは聖書的事実であることなど「賛美歌としてふさわしいかどうか」という基本的な事項、もう一つは「教派的信仰観」というものの反映である。例えば、神の力を殊さら強く押し出す、あるワーシップソングについて、「どこでこの賛美歌を歌うのか」という疑問が呈されたことがあった。つまり、賛美歌であるにもかかわらず、礼拝での会衆歌として歌われる場面が、他教派の信仰観では想定できない、あるいはかなり抵抗感があるという場合である。しかしそれは、その賛美歌は、ある教派において必要とされ、支持されているものなのである。それは、貧しい人々や社会的に難しい状況にある人々が多く住む地域の教会では、現状があまりに厳しく、全能の神の力に集中することでしか、現実に戻っていけない、ということがあるためということだった。実際、多くの教会ではどちらかというところ「若者の歌」のように受け取られ勝ちなワーシップソングは、かなり保守的な構成を持ち、厳密に効果が計算されて作られている。

その点においては、ウェスレーの賛美歌を用いた宣教も同様の戦略が認められる。当然ながら賛美歌には、社会が投影され、目の前の信徒が必要とする言葉が置かれるものである。その点において、賛美歌が「エンターテインメント性」を帯びることになるのを否定できない。そして、賛美歌の歌詞の変遷を読み解こうとすれば、単に聖書の御言葉そのものに寄るのではなく、そこに各時代に応じてどのような救いが見いだされてきたのか、社会的背景の理解が必要となる。その意味で、例えばルターの「神は我がやぐら」などは、ドイツで歌われることは少ない、というような現象が起こってくるのだろう。

また、エキュメニカルな動きの中で、最近の賛美歌学会では「賛美の共有」というものが模索されているが、これは、他教派の信仰の文化に積極的に学んでいこう、という姿勢の現れでもある。このこと自体は、ウェスレーにおいても明らかに見られるものであり、特に、昨今の頻発する災害や紛争、自分ではどうしようもない困難さの中で、社会から隔絶し、生きづらさや言葉を失うほどの喪失感を持つ人にとっては、「歌う」ということが、再び心を注ぎ出す

「言葉を得ていく」ということにつながるのには確かにある。そこに、人々を引き寄せ共感を渴望させる「エンターテインメント性」が生まれてくるのだろう。

現代社会においては人々の苦難さえ、ショービジネスとして社会に示される。キリスト教の宣教活動として早くから日本に登場した幻燈では、災害支援や孤児救済の資金集め等にも用いられてきた経緯があり、それは当時の政府の戦況報告などのニュース幻燈とも重なるものである。そして、現代の日本では毎年夏の大々的なチャリティー活動や、パラリンピックの報道や宣伝広告はじめ、各地の支援を必要とする状況や困難に打ち勝つ様子が、アイドルグループや様々なジャンルの芸術家等のナビゲートで次々と私たちの日常に映し出され、届けられていく。

日本におけるキリスト教が、何を宣教し、どう受け止められてきたのか。「メディア」「福祉活動」「賛美歌」の変遷は、それを示唆し、日本にとっての現代の「キリスト教」について考えるきっかけをなすのである。そして、そのような時代の変遷の中で、賛美歌集に掲載された歌だけでなく、雑誌などにも掲載された賛美歌なども参照し、世界のキリスト教会の中で、日本に住む私たちがどのような賛美歌を選択し、何をうたってきたのか初めて明らかになると考えるのである。

(奈良学園大学教授)

<参考文献表>

愛川潔編集，十河巖著『朝日會館史（大阪朝日編年史別巻）』朝日新聞社史編修室，1976年。

Edger, R. Frederick 1952. A Study of John Wesley from the Point of View of the Educational Methodology used by Hymn in Fostering the Wesleyan Revival in England. Ph.D. diss., Columbia University 1952.

井上章一『日本人とキリスト教』角川ソフィア文庫、2013年。

日本救世軍「歳末助け合い運動の始まり」2018年9月5日閲覧。「慰問かご」は「社会鍋」の前身。

<http://www.salvationarmy.or.jp/index.php?%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E9%8D%8B%E7%89%A9%E8%AA%9E>

細井勇 『石井十次と岡山孤児院』 ミネルヴァ書房、2009

上笙一郎 「関西児童文学史 稿・46 無弦＝高瀬嘉男と尾関岩二（上）」『日本古書通信』所収【12－13】2004年4月号。

北村宗次 「関西学院と『讚美歌』－由木康を中心に－」第39回関西学院史研究会（2014年1月16日）講演記録。

前島志保 「解説」『会館藝術 第1巻 1931年（昭和6年）』所収【237－247】2016年。

西阪保治、河本哲夫、秋山憲兄『日本基督教出版史夜話』新教出版社、1984年。

小倉孝 「朝日会館からフェスティバルホールへー関西の洋楽史画す二大殿堂」『大阪の歴史』第61号、所収0-29、大阪市史編纂室、2003年。

十河巖 「はなやかなフィナーレ－朝日会館三十五年の幕を閉じる－「年輪を数えて」」『朝日人』所収35、朝日新聞社、1963年1月号。

「関西楽壇は朝日会館から生れた」『大阪音楽界の思い出』所収【275－291】1975年。

山室軍平『わたしの青年時代』救世軍出版及供給部、1929年。

山室武甫 「訳者解説」（1970年）、岡田藤太郎監修、ウィリアム・ブース著、山室武甫訳『最暗黒の英国とその出路（1890年）』所収【400－418】相川書房、1987年。

山本美紀 「大衆娯楽と近代社会における人間教育への一考察－救世軍幻燈上映の日英比較をめぐって－」『人間教育学研究』所収【125－134】2016年。

「初期救世軍軍歌と日本製 Tune の登場－キリスト教の大衆化と近代日本キリスト教音楽文化をめぐって－」『ウェスレーメソジスト研究』所収【81－108】2016年。

【雑誌・団体資料】

朝日会館『会館芸術』第4号、1931(S6)年12月号

社団法人朝日新聞社会事業団、コドモの本編集部。

『アサヒカイカン コドモの本』

第2巻1号、1932年3月。

第2巻2号、1932年4月。

第2巻8号、1932年10月。

第3巻2号、1933年2月

社団法人朝日新聞社会事業団収支決算表 昭和3年1月25日-昭和3年4月
30日。

社団法人朝日新聞社会事業団事業報告 昭和5年5月-6年4月。